

2021年1月27日

学校での仕事を続ける中で、子どもたちから多くのことを学ばせてもらっています。教師と子どもとの関係は、学校という空間、時間を共有する中で「互いに思いやる」関係だ、ということに気づかせてくれたのも子どもたちでした。ちょうどイエスさまが語られた「互いに愛し合いなさい。」との言葉に呼応するものだと思います。

二十六、二十七日の月曜朝礼では、お子さんたちに次のような話をしました。



(手話で) みなさん おはよう ございます

先日、テレビでニュース番組を見ていた時のことです。そこはアメリカにある新型コロナウイルスにかかった方々が入院している病院です。目に飛び込んできたのは折り鶴でした。防護服と大きなマスクをした一人の日本人が、患者さんに折り鶴を渡している映像でした。コロナウイルスにかかった人には、家族も会うことができません。日本もアメリカも同じです。それなのにこの方は、新型コロナウイルスに感染した患者さんに、折り鶴を手渡ししていたのです。その方はこの病院で、チャプレンとして昨年夏から働き始めた関野先生という方だと紹介されました。

名前を聞いて、私はとても驚きました。何年前、関野先生のお話をキリスト教学校の新聞で読んだことがあったからです。そして、先生の話をもっと読みたいと思い、本を買いました。本には、

東京にある教会でのお話が書かれていたので、先生は今もそこにいらっしやると思っていました。

先生は東京の教会の牧師さんを十四年間務めた後、去年病院で働くチャプレンになろう、とアメリカに渡っていたのです。アメリカはコロナウイルスに感染された方々がとても多く、日本から行くことはとても大変だったそうです。到着した先生がチャプレンとして勤める病院は、新型コロナウイルスに感染した方々が入院している病院でした。関野先生は初めて患者さんの所に向かう時、「怖い：」「本当に入って大丈夫か？私も感染するのではないか。：」そんな思いから、一瞬足が前に出なくなつたそうです。

ひと月がたつたある日、関野先生は一人のお年寄りの男性を見舞いました。苦しそうにしているその方に、話しかけることなどできそうにありません。先生はただその患者さんのそばに座り、テーブルにあつた検査結果の書かれた紙を使って鶴を折りました。希望に向かって飛ぶ一羽の鶴。男性は何をしているのだろう、と興味深くその様子を眺めていました。折つた鶴をそつと渡すと、お年寄りは目を真っ赤にして涙を流しながら「私はこれを一生の宝物にする。そして、あなたが来てくれたことを絶対に忘れない。」と話したそうです。

そんなことがあつてから、先生はクリスマスにはたくさんのお患者さんや病院で働く人たちに、折り鶴をプレゼントしようと思ひ立ちました。日本では、病気のお見舞いや平和の願いの為に祈りを込めて、鶴を折ります。そこで関野先生は、日本人々々にお願ひしてみました。二百羽くらい届い

たらいいなと思つていたところ、なんと日本中から一万六千羽の折り鶴が病院に届いたのでそうです。その折り鶴は病院の中で、家族や友達もお見舞いに来られない患者さんの心の中で、大きな羽を広げました。

関野先生はそのときのことをこう伝えていました。「時がやってきました。世界最大のコロナ感染国、その最前線である病院の天井に数えきれないほどの鶴が羽ばたいた。皆が喜びの声を上げた。下を向き続けた患者さんたちは足を止めて上を見上げ、戦いの日々で疲れ切つた看護師さんたちは一日に何度も鶴を見に来ては『日本の皆、本当にありがとう。』と言つてくれた。そして、クリスマスの日、家に帰れないコロナ患者の皆にその鶴を一羽一羽手渡していった。」

みなさん、全世界の新型コロナウイルスに感染した方々が、一日も早く回復されるようにお祈り続けましょう。

(手話で) おはなしを おわります



祈り続けることは、その祈りが神さまに喜ばれる、純粹なものであるかを確かめる時間のようになっています。同時に、祈りの内容に敏感になる時間でもあります。東日本大震災で被災された方々、新型コロナウイルスに感染された方々のために祈り続けることでお子さんたちの心はきっと広く、深く育つていくと信じます。

(立教小学校校長 佐々木 正)